

# ショートショート こどものころⅡ



文・絵 中野 陽子

編集 川原 次郎

## ショートショート こどものころ II

はじめに	3
きらいなもの	36
さか上がり	40
お米屋さん	44
父の『クッククック』	48
ふじ子さんのおもてなし	54
見慣れないオートバイ	58
母特製	62
友達のお母さん	66
あとがき	70
美しい石けん	5
おやつ	8
白い大きな布	12
祖父のこと	16
星座	20
藤田さん	24
アメのお釣り	28
実家の祖母と若い女性	32

## はじめに

2021年10月に『ショートショート こどものごころ』を作りました。その後まだ気になる話がある感じがしたので今回『E』を書くことになりました。

『E』の反転点は子供と大人へへ同年代の方々からお声を頂いたことがはげみになり、それをも『E』へとつないだりなりました。



## 美しい石けん

「洗濯石けん買って来て」

そう母に言われ近くの商店街へ出かけました。お使いはそれまでも幾度となくしていたのですが、石けんを買うのは初めてのことです。

初めて石けんを買いに出掛けた私は雑貨店に入らず、棚に美しい色合いのものが並ぶ化粧品店に入ってしまった。しかしそれでも頭の中には洗濯石けんというのがちゃんとあったので、お店の人に「洗濯石けんください」と伝えます。

すると出てきたのは花のマークが入った石けんでした。

色はただのベージュ色ですし、匂いもいつも使っている洗濯石けんと同じですが、花と葉っぱの形が優しく線で描かれたその模様を私はすっかり気に入ったのです。

私にとって大変魅力的なその石けんを携えてルンルン気分であつて家に帰ります。

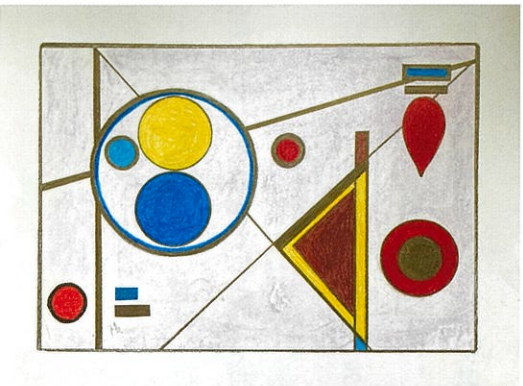
家に戻りその石けんを見せた途端、母は「なんでこんな石けん」と言いました。その声と表情から母は相当がっかりしているように見え、私は自分の失敗に気が付きました。

その頃の私は常に長女として母を失望させまいという思いで動いてきたのでこの事件はショックングであるはずなのですが、母を失望させたガツカリより石けんの美しい線の図形による衝撃の方が小学生の私にとっては心に残るものだったのです。

それは化粧品店から帰る道のりの私のルンルン気分と、母のがっかりとの間の大きなズレを理解した上でなお衝撃だったのです。

なズレを理解した上でなお衝撃だったのです。

今思い返してみても大きに言うのなら、この出来事は私にとって物の美しさ、芸術というものを初めて意識した瞬間だったと思われまふ。



## おやつ

8

子供のころ私の家の中には何もありませんでした。それでも不満はなかったように思います。

六畳一間に父、母、私、弟、妹三人の七人家族が寝ていました。ラジオがありました。

ただおやつには常に不満があり、いつも何か甘くて美味しいおやつが欲しいと切望していました。

私たち五人の子供にとって唯一の重大事はおよつの分け方です。例えばキャラメルは一箱に入った二十個を五人で四個づつに分けます。

ある時、覚えている限り一度だけ、キャラメル五箱が入った大きな箱が来ました。その時初めて皆が二十個入りのキャラメルを一人一箱ずつ貰えたのです。忘れられない感動でした。

またある時、私は母から貰ったお金で「お好みアラレ」を200g買いました。袋の中には七、八種類の色々なお菓子が入っていました。白くて丸いえびせん、醤油味のアラレ、ピンクのふあふあしたもの、魚の小さいの、空豆の揚げたもの、小さな昆布、白いアラレ、ピーナッツの小さいもの。

まず最初に新聞紙を広げてそれらのお菓子を兄妹五人がかりで種類ごとに分別し、それが済んだら分別したそれらを五等分に分けます。残ったものは再度混ぜて分けます。長女の私が公平になるよう注意深く分配作業をするのです。

9





## 白い大きな布

12

テレビが家にやって来るまで、私たち子どもにとってラジオとマンガ以外に面白い事はありませんでした。誰かから無料の映画の上映があるという情報を聞きつけては遠いところまで弟か妹、どちらかを連れて観に行ったのを覚えています。

夏のある夕方、小学校の校庭で映画の上映があると知り妹と出かけました。

校庭の真ん中に大きな白い布が張られており、その布に石原裕次郎の姿が映し出されます。

上映中、私は映画の内容よりもスクリーンであるその大きな布がずっと気になっていました。

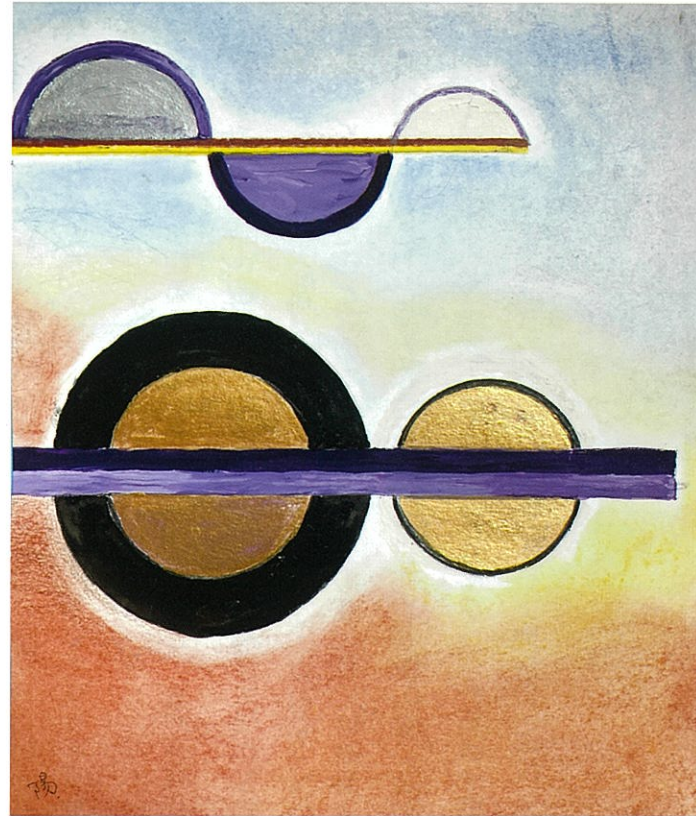
夜の野外に張られた白い大きな布は頼りなく常にふわふわ、ゆらゆらと動いていて映画どころではなかったのです。

いつもは学校の講堂で映画を観るのになぜ今回は校庭なのか、夏だから外でということになったのか、確かに涼しげではありませんでした。

誰かが良かれと思って考えたことなのでしょうが、その夏、私には映画よりも夜の校庭に不安定な設置でふわふわと浮かぶ白くて大きな布が理解し難い奇妙なものとして強く記憶に残りました。

13





## 祖父のこと

私は祖父にとっての初孫にあたるのですが、祖母と母は仲が悪く、私は母にべったりだったため祖父からあまり可愛がってもらえませんでした。次女は祖父の姉によく似ていたので大変可愛がられていました。

祖父は富山県生まれの人でしたが、父から聞いたところでは祖父は若いころから京都に憧れていたそうです。警察官として京都で勤めるようになり官舎が北野天神近くにあったので、父は北野天神が子供の頃の遊び場だったと私たちに話していました。

その後祖父が官舎から引っ越した先は二階から比叡山が美しく見える家でした。賀

茂川まで歩いて三分ほどのその家は私の生まれたところでもあります。

その頃の祖父は植物園に勤めていたようで、そのためか狭い庭に紅梅やその他の庭木がありました。私は子供ながら自分の家に他ではあまりみかけない美しい紅い梅の木があることを自慢したい思いでした。

その祖父は私が中学一年になってすぐに亡くなりました。その声が記憶に残っていないほど祖父は口数の少ない静かな人でした。思えば、祖父は若い頃の思いを叶え京都の地で家族に囲まれた生活を実現できていたのです。

誰もが自分の望みにそって方向を決める選択をしますが、祖父の選んだすべては私が選択する以前に私に続いているのだと感じます。

祖父が比叡山を眺めながら、お茶をのみ、新聞を読んだであろう場所で私は宿題をし、

夕暮れにはお寺の鐘が響いてくるのを耳にし、寝るときは賀茂川の流れを近くに感じつつねむり、夜中、町がすっかり静まると、遠く離れた二条駅から汽笛が別世界の音のように聞こえてきたのです。

祖父が選んできたものを私も享受しつつ成人したのだと実感します。生きていくときに会話を交わした記憶のない祖父に今になって感謝の気持ちを伝えたい、そんな思いがわ。



母には三人の弟がいました。一番目の弟である叔父の結婚式は、私が母の実家で目にした初めての華やかな出来事です。

式から一ヶ月ほど過ぎたある夜、私は母の実家にいました。そして私は新婚の叔父夫婦と三人で夜店に行くことになりました。

叔父と夜店に行くのは私にとって初めての事です。

黄昏が終わり、空が深い紺色になりかかる頃でした。

歩道に並ぶ夜店の電球の光は眩しく、目を刺すほどに輝いています。

その光が照らす綿あめ、りんごあめ、ススカステラ、ソースの匂いがあるお好み焼き、タコ焼き、それに風船釣り、金魚すくい、それらいろいろなものに心を奪われます。

いつもならそのうちの何か一つだけを手に入れ、疲れて帰るだけなのですがその日は違いました。道の角の光が少なくなったところまで来たとき、叔父が紺色の空を見上げながら「よう子、あれがオリオン座というんや」と空を指差しながら私に言ったのです。叔母も同じように空を見上げていました。

それまで私はキラキラした夜店の電球の下に並ぶものばかりに気を取られていたのですが、叔父のその言葉を聞き夜空を見上げたときの私の気持ちはまるでスイッチが切り替わったかのようでした。

輝く四つの星が長方形のようのでその真ん中に二列、三つの星が並んでいます。

それぞれ別々に光っている星たちが、オリオン座という一つの星座であるというのをその時初めて知ったのです。



私が立っている路上とは全く違う世界が私の頭上にはあり、そこには星座というものが存在しているという事を私は知りました。  
夜店の楽しいで人工的な光とは異なり、星の光は静かに冷たく深い紺色の空に輝いています。

そのころの私は近眼でビン底メガネをかけていたせいか、意識して夜空を見上げ星を見ることなどありませんでした。

叔父夫婦と夜店に出かけたその夜から私は星に興味を持つようになったのだと思います。



## 藤田さん

藤田さん。名字だけで下の名前は知りません。小学校の通学路の途中にあるタバコ屋さんのその子はいつもお母さんではなくおばあさんといっしょに居ました。

その子は私と同じように度のきついメガネをかけていましたが私とは違い、髪は整った美しいおかつぱでした。私はくせ毛で毛先はあちこちはねていたのです。

藤田さんは何かの事情があってか半年程おばあさんの家に来ているようでした。

おばあさんは背が高く細いからだつきの全然優しくない顔でした。

朝私たち小学生五、六人の一団が登校する様子を藤田さんはいつも玄関先で見えています。  
した。

こちらを見る藤田さんの全身から彼女の心持が表れているようで、その姿と表情を私はいまだに忘れられません。

登校する私たちを眺める藤田さんは、友達のいない自分の境遇を淋しく悲しく思っているように見えました。

弟と妹三人とにぎやかに暮らしていたその頃の私は、淋しいという思いを持ったことがなかったように思います。藤田さんの姿からおぼろげに人には淋しいということがあるのたと感じました。

理由は分かりませんがその時のことを今でも思い出すのです。



## アメのお釣り

28

実家へ母と二人出掛けた帰り道、あたりはもう暗くなっていました。春だったのか秋だったのか定かではありませんが、暑くもない寒くもない心地よい爽やかな宵だったのを覚えています。

電車を待っている時、母は近くにあった電球が明るく光るお菓子屋の方を指して「あそこでアメ買ってきよし」と私に千円札を渡しました。私は千円札を受け取り、買ったアメは電車を待つ間に自分にもらえるものなのか、あるいは家で待つ妹たちへのものなのか、などと思いつつお菓子屋に向かって歩きます。

お菓子屋ではお婆さんが店番をしていました。私が千円札を渡し、袋に入ったアメを受け取ったあと、お婆さんはお釣りとして九千円と小銭を私に差し出したのです。私はすく驚いたのですが、何も言わずにそのお釣りを受け取り母のいる方へ戻りました。

「お母ちゃんお釣りこんなん」と言いながら握り締めた九枚の千円札を見せると母はすべに「返してきー」ときつろ調子で言いました。

私はお菓子屋のお婆さんにお金を返し、そしてそのあとは何事も無かったかのように家に帰ったのです。

この時の私はなぜ母がいつものようにしっかりと私を叱らなかったのだらうと疑問に思っていました。お釣りを受け取った時に「間違っています」とお菓子屋のお婆さんに言わなかったのは私のミスだと自分でも思っていたからです。

今思えば小学生だった私の頭の中には「お金＝母喜ぶ」と言う単純な図式がありま



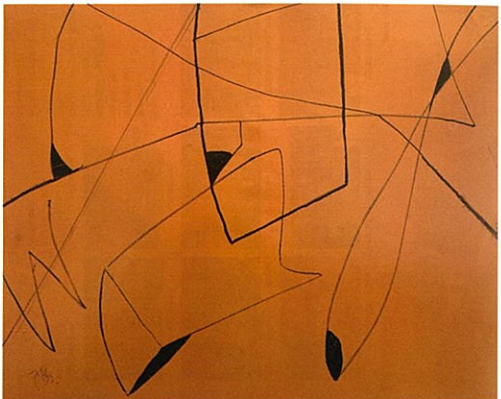
した。そして母も私の頭の中の図式について何となく察していたのかも知れません。

30

その頃の私は母の事が大好きでした。

もし仮に母が私に盗みを指示したとしたら私は盗みをし、そしてそれを褒められたならもっと盗みを働いた事でしょう。それ程に私は母の事が好きだったのです。

しかし母は正しい人だったので私は悪事に手を染める事なく無事に大きくなりました。



## 実家の祖母と若い女性

小学五年か六年の頃、私は時間に余裕ができると月に何回か母の実家へひとりで行きました。歩くと一時間近くかかるのですが、その頃どうして行ったかよく覚えていません。昼間はたいてい祖母がひとり家にいました。

「いんじちは」と言いつつ上がって居間に行くと、その日は若い女性が祖母の斜め横という感じで座っていました。祖母にそこのと言われ座ると、テーブルをはさんで私とその女性とがちょうど向かい合う形になりました。座ってはじめてそのひとが泣いているのに気がつきませんでした。

静かに泣いていたので部屋に入っただけには気がつきませんでした。私は驚きましたが、その場のふんいきで何も言わずおとなし二人の様子を見ていました。その女性はほとんど顔を上げず下を向いたままシクシクと泣きながらポツポツと言葉を発していました。

目の前のブドウの粒をゆっくりと一粒ずつ食べているうちに私にも話の内容が少しずつわかってきました。その女性は私の叔父に捨てられ、祖母にそのつらさ悔しさを聞いてもらいに来ていたのです。母から三番目にあたる叔父は、子供の私からみてもパリティとした、普通より格好の良い方でした。叔父に捨てられたと言うそのひとは小柄で地味な感じのひとに思われました。

私の目の前の二人は一時間経っても二時間近く経ってもそのままでした。その女性の話の全てをゆっくりと聴き、なんとしてもなぐさめたいという思いが祖母からあふれていて、心からその女性に寄り添う目の前の祖母のやさしさが子供の私にも伝

わかりました。

なぐさめようとする祖母と静かに泣く女性とはそのうち一つのかたまりとして一体化してしまったようにも思えてきました。

柱時計をみて私は「おばあちゃん帰るわ」といい、来たときと同じ位置にいる二人を残して祖母の家を出ました。

祖母はなぜ私に「外で遊び」と言わず二人の様子を聞かせたのだろうと私は帰り道に思いました。



## きらいなもの

小学生の頃怖くてきらいだったのがへびです。

川原で遊んでいると時々出くわし驚かされました。噛まれたことはないのですが、あの姿は見るだけでどっにも恐ろしいのです。

それとゴキブリです。

その頃の私の住む地域にはまだガス管がひかれておらず料理もかまどで作っていました。

臭いが出る焼き魚やカレーなどを作るときはかまどではなく、裏庭にある台の上に七輪を置いて料理をしました。母がそこでカレーを作るときはもちろん私も手伝うのですが、その日はカレーの香りに惹かれてかゴキブリがどこからか飛んできたのです。

走るゴキブリは丸めた新聞紙で撃退できるのですが、飛ぶゴキブリは恐ろしくてどっにもなりません。ベタバタした羽根をバタバタと動かして近くに寄ってくるのです。一度カベにとまり、静かになったかと思いきや再び飛びまわります。

これは私にとって恐怖であり、たいへん不愉快でした。母との楽しいひとときがゴキブリの襲来によって完全に中断されてしまいました。

その後しばらくして私の住む地域にも都市ガスが伸び、料理をガスコンロでするようになったので飛ぶゴキブリとも出会ったことは無くなりました。





## さか上がり

40

私はずっと運動が苦手でした。

走るのはビリにならない程度、ドッジボールはきらいでボールにさわらず逃げまわっていました。ごんへんさうのか、反応がにぶいのか、鉄棒のさか上がりも私は難しく出て出来ませんでした。

しかし、心の奥には皆と同じように「クルリ」とまわるのを是非できるようになりたいというのぞみがあったのです。

校庭に誰もいないとき、鉄棒に向かって何回かやってみましたが見えませんでした。校庭に誰もいないとき、鉄棒に向かって何回かやってみましたがやはりできませぬ。同級生が素早く足を上げると「体が軽やかにぐるりとまわる」その心地よさを想像して私もそれを体験したいと思っていました。

ある日のぞみとする回転に向かって足を上げたとき、私のポケットからヒラヒラパラパラと何かが飛び散りました。ピーナッツのうすくて軽やかな赤茶色の皮が沢山とび出たのです。母から貰って食べたあとのものでした。

私は自分の行儀のわるさを同級生にみられたくないし、もし見られると恥ずかしいし、もうさか上がりごんへんさうではなくなり、気持ちはとにかく早く帰ろうという思いに変わりました。

結局私の望みはヒラヒラパラパラにじゃまされ一瞬にしてごんへんさうが消えてしまったのです。

41

陽





## お米屋さん

44

通学路で家から歩いて数分の所にお米屋さんがありました。

ときどき祖母に言われてそこにお米を買いに行くのですが、夕方に行くと店主の人はすでにお酒を飲んでいて、顔は赤くお酒の匂いをさせながら出てきました。

私は好き嫌いがはっきりしていて、理由はよくわかりませんが、その赤い顔を見るたび私はこの人を好きではないと思いました。

私に向けられたその目は赤い顔とは対照的に冷たく意地悪そうで、たまに来て計り売りで二升、三升と少ししか買わないじゃまくさい客だと思われるだろうと私は勝手に想像していたのです。しかしその店主の奥さんと娘さんは二人とも

美人で感じのよい人たちだと近所では評判でした。

ある日、ラジオ局と呼ばれている隣のおばあさんが私の顔をみるなり興奮ぎみで話し出しました。

「よう子ちゃん、お米屋さんの娘さん去年結婚しはったやろ、その娘さんがついでこの間男の子を生んですぐ死なはったんや。大変や。奥さんが赤ちゃんの面倒を見たはるようや。それに奥さんの髪の毛が白うなってる。前は黒い綺麗な髪やったのに」

こちらから何も聞いていないのに、おばあさんはいつものように子供の私にまであれこれ話しました。

その数日後お米屋さんの奥さんを見かけた時、黒かった髪がやはり白くなってい

45



るのに驚き、私は母に聞きました。

「お母ちゃん、お米屋さんの奥さんの毛はなんであんな白なってしまったんやろ」  
母は「それほど奥さんはびっくりはったんや。ものすごい大変なことやったんや。そんなとき毛が白くなると聞いたことはある」と言いました。

娘さんの死は遠く感じられても奥さんの変化は自分の目に実際に映るショックン  
グな出来事でした。



## 父の『クックック』

私が中学一年生のとき祖父が亡くなりました。

祖父は天理教の分教会の会長をしていたので祖父の死に伴い、父が会長を引き継ぐことになりました。父はあまり気が進まないようでしたが、祖母の強い思いにより引き継ぐことになったのです。

父が会長になって早々、ある教会行事の日の出来事です。

六畳の部屋二間の中に私たち家族と教会の信者さんを合わせた二十人ほどが正座し、一段高くなった十畳ほどの神殿に向かって頭を下げ、父が祝詞を読み上げる

のを聞いていました。父は祝詞をもった手を高く上げ、よく透る声で読み上げていました。

祝詞をあげる声以外聞こえない静寂の中に、しばらくすると「クックック」と言う笑いを堪えるような父の声がしたのです。祝詞が終わるまでの間に二回その「クックック」がありました。

私は一体何が起こったのかと大変驚きました。祖父がこの役目をしていた時にはもちろんなかったことです。

しかしなぜか祖母も母も信者さん達も皆騒がず、神妙な姿勢のままでした。そして祝詞は問題なく読み上げられ、行事は何事もなかったかのように無事終わりました。

行事が終わった後、私も弟妹たちも周りの雰囲気から父のことについて口に出して良いのか悪いのか考えあぐねていました。

普段、祖母と母は仲が悪いのですが、その時期はとにかく父を教会の会長にしようという考えにおいて二人は一致していたようで、信者の人たちももちろん同じ考えのようでした。

後日、何かの折に妹たちと「お父ちゃんあのとき笑ろたはったなあ」「そうみたいやな、なんでやる」と父について話したことを覚えています。

そのさらに後日、母が私に話してくれたエピソードがあります。

父と母が仲人をした結婚式でのこと、新郎新婦の親族一同の前で父が仲人の挨拶をしたとき、途中堪えながらも父の「クッククック」が出たそうです。

そのエピソードを私に話す母の様子は、困ったというよりも実際起こった事実に対して淡々としているような感じでした。

けれどもその後、父の「クッククック」は家族も信者さんたちも気づかないうちに、父が教会行事での役目に慣れ、恐ろしい緊張から解放されるにつれ自然と無くなったようでした。





## ふじ子さんのおもてなし

母の三番目の弟にあたる叔父が結婚しました。

お嫁さんはくっきりと整った顔立ちと姿で子供から見ても「美しい女の人やなあ」と思わせる人でした。母からはそのお嫁さんのことは「ふじ子さん」と呼ぶように言われました。

「ふじ子さん」

名前を聞いても「ふあー」と言う気分になりました。

叔父とふじさんはしばらく母の実家で暮らしていました。

ある日私が一人で実家に行った時のこと、祖母と叔父は留守でふじさんから「よう子ちゃんちょっと待ってて」と言われテーブルの前に座りました。

しばらくするとお菓子と思われる黒いカタマリが乗ったお皿と、これまた黒い色の飲み物の入ったカップが角砂糖と一緒に運ばれて来ました。

「どうぞ食べて」とふじさんが言います。

テーブルの上にはお菓子と飲み物、そしてふじさんの向かいに座る私。

いつも騒がしい弟や妹はそこにはおらず、私は何やらいつもと違う別の空間に移動して来た気分になっていました。

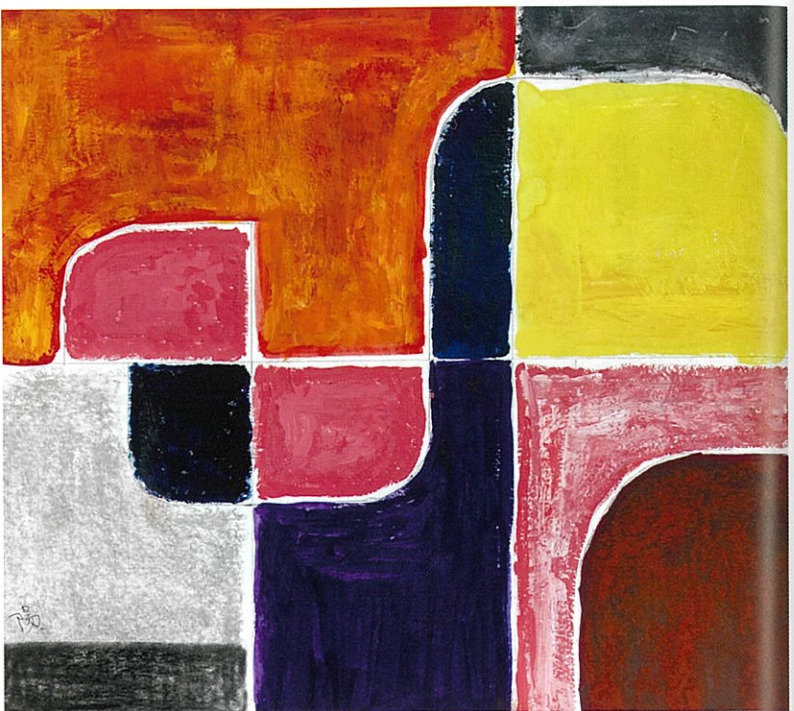
私が初めて口にしたその黒いカタマリは香りのある甘いケーキでした。そのケー

キと苦味のある香りよい飲み物とを交互に口に入れることに私は夢中になりました。

感動ものでした。子供時代の大発見です。私の家にはこのようなものはなかったのですから。

その時の私にはふじ子さんが夫の姉の長女にあたる私に特別丁寧にもてなしてくれたように感じられました。その大発見がチョコレートケーキとコーヒーだという事は後から知りました。

その日から間も無くして叔父夫婦は引越したので私がその後、黒いカタマリと飲み物に再び出会うのに相当な時間がかかりました。



## 見慣れないオートバイ

私の家の隣近所は七軒の家が道路に面してし字型に並んでいて、その結果家の前には丁度よい広さの三角形の土地が子供たちの遊べる場所としてありました。毎日男女六、七人の子供が集まって夕方、母親から「こはんやし、帰りや」と声がかかるまで遊んでいましたが小学生の頃から夕食の支度を手伝っていた私とその仲間に入るのはたまにのことでした。

ある日私もみなと一緒に遊んでいたとき、私たちの町内より少し南の方に住んでいる男性が大型のオートバイに乗って「ダッダッダ」と低いエンジン音と共に私たちの横を通っていきました。

黒い車体でよく見えませんでした。その人のオートバイには大きさ三センチくらいのカラフルなボタンのようなものが沢山並んでついていました。初めてみた私はその派手な乗り物に驚きました。そしてもっとびっくりしたのは少しカーブになっている道でオートバイの姿が見えなくなる直前に一緒にいた男の子たちが皆で叫んだことです。

「イロキチガイ、イロキチガイ」と一瞬のことでした。彼らは叫び終わるとすぐまた何もなかったように、同じ遊び(メンコ、ビー玉)に戻りました。

私はまったく意味がわかりませんでした。後で妹から聞いたところによると、たまにあのオートバイの人が通ると、決まって男の子たちが一斉に「イロキチガイ、イロキチガイ」とその人に聞こえるかどうかギリギリのところまで叫ぶのだそうです。



でも私はあれを「イロキチガイ」というのは間違っていると思っていました。「イロキチガイ」の意味をよく知らないで、目で見たもの、そしてそれが見慣れない変なものだったとき、それを初めてみた男の子たちがとっさに口に出した言葉が「イロキチガイ」だったのだろうとそう思えました。





私の家は常に現金というものが不足していました。天理教の小さい分教会でしたので信者さんから野菜、お米などをもらうこともあり、食べることについてはあまり困ることはありませんでした。

父の身体が弱かったのと、教会の会長という立場であったことから働きに出るといつ考えは祖母と父にはなかったようです。

母はそれでもやはり小学校の給食費などで現金が要ると思い働きに出ますが、家に現金があるとき、ないとき、いろんな日がありました。

小学生の私の遠足の日、その時は余裕がなかったのか母は私に持たせるお弁当にうすくイチヨウ型に切ったキュウリと赤い色として魚肉ソーセージをイチヨウ型に切ったものが入ったちらし寿司をつくりました。ちりめんじゃこ、かんぴょう、しいたけ、色どりの玉子などは入っていません。

母の作ったものはそれなりに色合の美しいものでしたが私は見てすべ「ちょっと変や」と思ったのを覚えています。

母には洋服、おかし、料理などいろいろ作ってもらいました。絶対に声に出しては言いませんでしたが、その日のおすしだけは「変や」という感じでした。

昼食のとき、私は中身を知っていたのでみんなに見られないように上手く食べたのだと思います。友だちの「変なおすしやなあ」という声を聞いた覚えがないの

で、問題なく済ませたのでしよう。そのあと、そのおすしとは一度も出会いませんでした。



## 友達のお母さん

66

小学生の頃、近所で一番仲の良かったみっちゃんがある日嬉しそうな顔で突然「今日お母さんが帰ってきて今家にいはるし会いに来て」と言い、私の手を引っばっていききました。

みっちゃんのお母さんはいつもは入院してずっと家にはいませんでした。私はみっちゃんといっしょに玄関からぐるっとまわってうら庭へ行きました。お母さんは縁側に向かって座っていて、私たちが行くところを見ました。着物を着たみっちゃんのお母さんの姿は突然で驚きの中にあっても、また数分間のことも、私の記憶にはつきりと残りました。

色が白く顔のかたちはみっちゃんに似ていました。やさしそうな、静かな感じのお母さんで、日々元気に忙しく動きまわる私の母とはちがう感じでした。

一日か二日ですぐ病院に戻るとわかっていても、今お母さんが家にいることがものすごく嬉しいうことだというみっちゃんの気持ちが私には想像できませんでした。

帰り道お母さんとみっちゃんそれぞれの思い、「今日か明日かぎりだ病院にもどる」そのことが、私の中に入り冷たい風がどこからか吹いてくるように感じました。

家に戻ってもみっちゃんのお母さんに会ったことは家族の誰にも言いませんでした。

はびへんしてみっちゃんのお母さんが病院で亡くなったことを知りました。

67





## あとがき

頭の中、心の中のものが本という形になるとなぜかすっきりとした気分です。子供ながらその時々のお出来事に反応し、考えたり思ったことなので、良いことも悪いことも懐かしい感じがします。私の絵も「変だ」というようなものですが、頭の中でおもしろいと思ったものが好きな色、線、形となったものです。

それと気になったのは教会のことですが、両親ともが子供の自主性を尊重したので、誰も教会に残らずそれぞれが自立していきました。親のお陰と心から感謝しております。

皆様お読み頂きありがとうございました。次は「大人になって」20代、30代とその頃のことを書いてみたいと思っています。予定は未定です。

2024年5月1日

## プロフィール

### 中野 陽子 (なかの・ようこ)

1947年1月22日生まれ

1959年京都市立上賀茂小学校卒業

1962年京都市立加茂川中学校卒業

1965年京都市立紫野高校卒業

2024年現在 77歳

### 川原 次郎 (かわはら・じろう)

1989年4月20日生まれ

中野陽子の甥

## ショートショート こどものころ II

---

2024年7月1日 初版 第1刷発行

著者 中野 陽子

発行者 中野 陽子

〒603-8843 京都市北区西賀茂南今原町104-1

アトリエハル

製作 株式会社ウインかもがわ

〒602-8119 京都市上京区出水通堀川西入る 亀屋町321

☎075(432)3455

印刷所 新日本プロセス株式会社

---